

アトリエ 琉游舎 だより 32号

2018年8月1日発行

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

お盆施餓鬼法要

わたし達の祖先を想う日

8月19日(日)13時半から

- お盆は祖先の霊を供養する行事です。この期間には祖先の霊が子孫や家族の元に帰って来るとされ、盆踊り、精霊流し、迎え火、送り火などの様々な行事が営まれます。
- 仏教が日本に伝来して、この日本人古来の祖先への感謝と供養の気持ちが仏教の考えと融合し「わたし達の祖先を想う日」として日本人の生活に定着してきました。
- 施餓鬼会は貪り苦しむ餓鬼に対し飲食を施し、先祖代々や広く無縁の諸精霊を供養する法要です。自分の命はすべての生命と繋がっていることを自覚し、自らの欲や貧りを反省する大切な法要です。
- 琉游舎ではこのお盆と施餓鬼会を融合して「お盆施餓鬼会」法要を行います。
- 有縁（親や祖先）の故人に対する報恩感謝だけではなく、有縁・無縁を問わないすべての精霊への供養と回向の法要です。
- 一年に一回、自分の近い故人や祖先に思いをめぐらし感謝し、また永遠の過去から永遠の未来までの、生きとし生けるものにも思いをめぐらし感謝し供養する日にしたいと思います。
- 受難、殉難、遭難、自然災害、人為災害、戦争、病没、公私問わず、有史以来亡くなられたすべての方へ供養・回向し、私達の安寧と生きとし生けるものの平和を祈念いたしたいと想います。
- 琉游舎はすべての宗派・宗教にもオープンに開かれた場所です。仏教の行事だから、日蓮宗の法要式だからとのご懸念は無用です。私達の祖先を想い、広くすべての人達のいのちに感謝し、これからの平和と安寧を願う方であれば、どなたでもお越し下さい。一緒に祈念いたしましょう。お待ちしております。

※8月の「写経会」はお休みいたします。9月の第1日曜日（2日）と第1火曜日（4日）に行います。

※8月9日から16日までの定期開催の会はお休みします。その時期の「映画会」「詩話会」「読書会」はお休みとなります。

※読書会は8月28日（火）、映画会は8月23日（木）、詩話会は9月8日（土）から再開します。

夏休みに入りました。朝のラジオ体操、午前中の宿題、午後からのプール、友達やいとこ達との虫取りやボール遊び、そうめんにスイカにかき氷、蚊取り線香に扇風機、花火、昼寝。学校の日課から解放された自由な毎日。50年前の私と今の子供達の夏休みが同じとは思いませんが、夏休み前には「さあ今年の休みは何をして遊ぼうか」と心躍らせていることには違いないと思います。夏休みは子供は子供なりに「夏と遊び戯れる」「遊戯三昧」の貴重な日々です。

「遊戯」を「ゆうぎ」と読むようになったのは明治時代以降のことです。そこから「遊戯」は主に子供の遊びごとの意味に使われてきました。鬼ごっこ、綱引き、ままごとのような子供の遊びや、「お遊戯」と呼ばれる幼稚園や小学校の集団的な遊び踊りを表す言葉です。ところで子供の遊びの起源は実は大人の行事のまねごとから始まっていることが多いのです。近代以前の大人の行事と言えばそれはほとんどすべて宗教的行事と言っても良いでしょう。鬼ごっこは鬼追いなどの神事芸能の模倣から子供の遊びへと一般化したものでしょうし、綱引きも元来は豊作を祈ったり、豊凶を占うための神事行事だったと思われます。子供にとって「遊戯」は大人の行事をまねることで、成長し社会性を身につけていく中で欠くことのできないものだったのです。

「遊戯」は明治以前は「ゆげ」と読み、最初は仏教用語として伝来してきたものと言われています。原意は「いっさいの束縛を脱して自由自在の境地にある」ことを意味します。法華経の中でお釈迦様は「私は衆生の父であるから、彼等の苦難を抜き無量無辺の仏の智慧の楽しみを与えて、自在に遊戯できる人生を与えなければならないのです。」^{注1}と言っています。「遊戯」の境地は「自由自在で何のものにもとらわれない」境地です。これはありのままに観ることによって得られる境地であり、安らぎのところです。つまりは悟りの境地ということです。「ゆうぎ」が「ゆげ」へと読み方が変わると子供の遊びが悟りという一見無関係な世界に変身してしまいました。しかしこれは読み方で意味が変わったわけではありません。「遊戯」の言葉に通底する「子供の遊び」と「悟り」の本質を、私達は見誤らないようにしなければいけないと思います。

子供は遊ぶとき、一心不乱に遊びます。親の言葉も注意も聞かず、無邪気に無心に一つのことに集中しています。いわゆる遊びだけでなく、勉強でも、スポーツでも、習い事でも何でも同じです。一つのことに心乱れず専心し、邪な気持ちは一切無く、その行為と遊び戯れているのです。そのとき子供は「いっさいの束縛を脱して自由自在の境地にある」のだと思います。これが「遊戯」の本質です。私達大人は日常生活の中で子供の遊びのように無邪気に一心不乱に無心になることはなかなか難しいことだと思います。無邪気になれば幼稚だと言われ、一心不乱になれば少しはまわりのことを考えろと言われ、無心になればつけ込まれる。とかくこの世は不自由で生きづらい。人は普通の日常生活を送っていたのでは悟りの世界なんてとっても無理だと考えます。そうすると普通の人にはとうてい出来ない難しい修業をして、難解な仏教理論を与えてくれる人に、お布施と引き替えに自分の悟りの境地をゆだねるのです。これが現代人が宗教へと導かれる一つの典型だと思われます。でもここには「遊戯」のかけらも見ることが出来ません。あえて断言してしまいましたが「遊戯」のない悟りは偽の悟りです。「悟り」という言葉に心も体も囚われの身になってしまっているからです。

子供だけでなく私達大人も「遊戯」という言葉を取り戻すことが必要です。日々の生活の中で一時でも、心から一心不乱に無邪気に遊び戯れる「遊戯三昧」の時を過ごすことが、安らぎのところへと向かう行いの道を歩むことであり、すでにその時こそが安らぎのところでもあるのです。ひとそれぞれ「遊戯」のカタチはいろいろあると思います。そこに善悪、低俗高尚、有用無用などの社会的な価値観は全く必要ありません。自分自身が「いっさいの束縛を脱して自由自在の境地にある」ことがすべてです。大人の神事のまねごとが子供達の「遊戯」の起源ならば、私達はそこに通底している自分なりの自由自在の境地を、子供達の「遊戯」を見本に、自分なりの方法で取り戻していくことができるはずで、そこは自分なりの安らぎの場所と時間であると信じたいと思います。

私も毎日遊戯三昧の日々を送っています。朝勤や写経会や勉強会は言うまでもありませんが、朝のラジオ体操、畑作り、鳥や虫の声を聞きながらの散歩、初めての方との語り、琉游舎で過ごす子供達を眺めること、先日のイベント観戦広場の企画や実施、次の企画を考え打ち合わせし議論し実現に向かうこと、ランニングにゲームに読書、こうして「狂言綺語」を書いていることも、ひょっとしたら毎日の食事の後片付けもその後のお酒も睡眠すらも「遊戯三昧」の時ではないかと思っています。

「遊戯三昧」の日常はことによると自由気まま、お気楽な毎日にも **琉游舎：戸井 出琉・恭子**
見えてしまいます。それでもいいんだと言い切るには **お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152**
私はもう少しいろいろと遊戯する必要がありそうです。 **矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850**
それではまた次号でお会いしましょう。（出琉） **Mail:toi101izuru@outlook.jp**